

# 古代語の副詞「すなはち」の考察

## ―「即」との比較から―

山崎 貞子

### 一、はじめに

現代語の「すなわち」は前の文や語の言い換えであることを表す接続詞で、前後の内的なつながりの関係が強い。古代語の「すなはち」は、事態の時間的な位置づけを表す名詞と、起動までの時間量を表す副詞が、主たる用法であって、時間的に緊密な関係を表す。「すなはち」は、本来動作の終了時点を示す名詞であったが、後続の動作・事態が連続して発生することを表す副詞になった。漢文訓読では、「即」に同様の意味があることから、「即」字を「すなはち」と読むようになり、他の「則」「乃」「便」等にもこの訓が用いられた。その結果、接続詞としての順接や換言の用法が、「すなはち」に影響を及ぼしたとされる。<sup>①</sup>

従来「すなはち」は、漢文訓読の影響を受けた語として

論じられてきたが、その意味に着目すると、動作・事態の終了とともに、次の動作・状態が開始する状況を示しており、継起的な時間関係を表すという特徴を持っている。ここでは、中古の和文の「すなはち」の時間的意味に焦点を当てて、その意味・機能について考察する。また「即」との関係を明らかにするために、上代の『古事記』『日本書紀』『万葉集』の「即」、『今昔物語集』の「即」について比較検討する。

### 二、「すなはち」の時間的意味

『万葉集』に「仮名書き」は見られず、次の「登時」の一例が「すなはち」の訓を持つと考えられる。

(一) 霍公鳥鳴之登時君之家尔往跡追者將至嶋

(ほととぎすなきしすなはちきみがいへにゆけとおひ  
しいたりけむかも)

『万葉集』卷八・一五〇五)

(二) について、山田(一九三五)では、「登時」は、中国の後漢以降六朝頃の俗語であつて「すなはち」の訓が与えられたとし、「即時」に等しいとしている。小島(一九六四)も、同様の指摘をした上で、その訓について次のように述べる。<sup>注②</sup>

「登時」は、スナハチ(「即」)とも、ソノトキ(「即時」)ともよめるが何れも同じ意である。(中略)もともと、ソノトキはスナハチと同じ意味である。ソノトキとは丁度その時にあたる意で、換言すればスナハチ(短時間を示すスナハチ)の意ともなる。(中・八二八頁)

『助字辨略』にも「登時猶言「即時」とあることから、「登時」の訓が「すなはち」であることが認められてきた。(二)は、「ほととぎすが鳴いたその時すぐにあなたの家に行つてなけと追いやつたのですが、もうそちらについたでしようか。」という意味になる。

「すなはち」の語源について、吉田(二〇〇二)では、上のスナはサ変動詞のス(為)、ナは連体格助詞のナ(一般に使われるノの異形)と考えられ、ハチはハテ(終・果)であるとして、「スナハチは『為ることの終(は)て』の意

で、『とどの詰まり・するとすぐ・する結果は』の構造と同じく、スル事の果テがソノ時・直チニ・スグニの意味に移つていった。」(一一二頁)とする。<sup>注③</sup> 吉田は「すなはち」の意味を、動作の終了の時点から、時間指示を表す名詞「その時」・起動からの時間量の小を表す副詞「すぐに」に変化したと捉えている。現代語の副詞研究では、仁田(二〇〇二)が、事態の外的な時間的位置づけ、言い換えれば、時間軸状における事態の出現・存在位置を示すもの(「そのころ」「その時」など)を時の状況成分とし、時間の中での事態の出現や展開のありようという、事態の内的な時間的特性に関わるもの(「長らく」「すぐに」「すでに」など)を時間関係の副詞としている。<sup>注④</sup> (以下時間副詞と称する。)

ここではこのような「すなはち」の時間的意味に着目して、「すなはち」について検討する。

中古の和文の「すなはち」に次の(1)～(5)の用法があるが、これらのうち、接続詞である(4)は、『宇津保物語』に一例、(5)は、『古今和歌集』仮名序の一例のみである。

(1) 名詞として、連体形に承接して、従属節や副詞句を作るもの「…するとすぐに」

(2) 名詞として、時の状況成分となるもの「そのとき」

(3) 副詞として、時間関係を表すもの「すぐに」

(4) 接続詞として、前文の結果であることを表すもの「そこで」

(5) 接続詞として、前文または語のいいかえを表すもの「いいかえると」

(二) 阿修羅、いやますますに怒りていはく「…天稚御子くだりまして、三年掘れる谷に、天女クダリ、音聲樂をしてうエし木なり。さてすなはち、天女の給はく『此木は、阿修羅の万劫の罪半過ぎむ世に、山より西にさしたる枝、枯れむものぞ…』と、の給とし木なり。」

『宇津保物語』一・四一・三

(三) その外に近き世にその名聞こえたる人は、すなはち僧正遍昭は歌のさまは得たれども誠少し

『古今和歌集』(仮名序)

秋山(一九九八)では、中古の和文の「すなはち」について、(3)が圧倒的に多く、その用法は固定化しているとして、副詞から接続詞への拡大について簡略に述べている。<sup>注⑤</sup>ただし、副詞がどのように固定化しているのかという点については言及していない。また接続詞への拡大については漢字「則・便・乃・載」等との比較や各資料での詳細な

調査が必要とされると考えられるので、ここでは、「すなはち」の主な用法である(1)(2)(3)に絞って検討する。

山田(一九三五)では、(1)の連体形に承接するものを取り上げ、「いづれも即時の義に近しと見ゆるが、その語の本質を見れば、これらは、すべて連体語を伴へるものなれば明かに体言にして副詞にあらず。さればこの語は『一定の時』をさせる語にして決して副詞にあらず。」(二七五頁)と述べている。また(2)(3)については、「多くの『すなはち』はなほ名詞なるべく、よしやこれが既に副詞の性質をうけたるものとすとも、その意義は『即時に』といふ如き意味にして漢字の『乃』『即』『則』などの意なる『すなはち』にあらざるは論なきことなり。」とする。山田は、副詞であつたとしても本来の名詞の意味を有するとしているが、名詞と副詞の意味について再考し、その時間的意味を明らかにすることを試みる。

まず、(1)連体形に承接して、従属節や副詞句を作る「すなはち」から見ていく。

(四) 集まりてとく下さんとて、綱を引きすぐして、綱絶ゆるすなはち、八島の鼎の上に、のけざまに落ち給へり。  
『竹取物語』五二・六

(五) 帝、舞ひはつるすなはち二所ながら召しあげて、

土器とらせて、かうの給ふ。

『宇津保物語』二・四六・二二

(六) かの母の朽女、さがなき物宵まどひしてねにけるこそあれ、夜ふくるすなはち目をさまして起き上りて

『大和物語』三六五・一二

(七) 里にても、まづ明くるすなはち、これを大事にて見せにやる。

『枕草子』八七・一三三・一四

(八) 今の程は何とも見奉り給フまじきものを、生れ給ヒしすなはちより御懷放ち奉り給はず

『宇津保物語』三・三二・一

(九) わたり果てぬるすなはちは心地もまどふらん、我も我もとあやふくおそろしきまでさきに立たんといそぐを

『枕草子』二五四・一一

(二〇) 春たたむすなはちごとくに君がため千とせつむべき若なりけり

『古今六帖』四

(四) は、中納言が燕の子安貝を手に取ったというので、

「集まって早く下ろそうとして綱を引っ張りすぎて、綱が絶えるとすぐに、八つ鼎の上に仰向けざまに落ちた。」という意味である。「綱が絶える」と「落ちる」ことが、継起的な関係であり、「すなはち」は、「…するとすぐに」という意味を表す。(五)は「舞終わるとすぐに」、(六)は「夜が更けるとすぐに」、(七)は「明けるとすぐに」で、いずれも連体形に承接して、従属節を作っている。(四)(五)(六)(七)は、動作・状態の終了とともに、次の動作・状態を開始することを表す。これらは、(二)の『万葉集』の例と同様の用法であり、「すなはち」が、終了の時点を示すとともに、次の動作の起動のありようを表している。また副詞句を作る(八)は、「生まれ落ちたその時から」で、過去の時点を示し、(九)は、「行列が終わったその時は」で完了の時点を示している。(二〇)は「立春が来るたびに」で未来の時点を示しており、「すなはち」は承接する時制を選ばないことがわかる。

次に(2)名詞として時の状況成分となるもので、時間軸上の位置を示すものを挙げる。

(一一) 大將「いふかひなき事する君かな。まろが子は、すなはちより懷にこそ入レ居たれ」

『宇津保物語』三・四一〇・九

(一二) 督の君、さすがにあはれにて、「爰にはすなはちより、『御夜中曉の事も知らでや』と歎き侍りしかど、道頼が思ふ心侍りて、『しばし』と制し侍りしなり。」

『落窪物語』一八六・一一

(一三) 日さしあがる程に夜さりの事ども申させ給。

若宮は、すなはちより寢殿に通る渡殿におはしまさせて、内藏の命婦・殿々宣旨など添ひ奉りて

『榮花物語』下・二二七・二二

「すなはち」の名詞の用法のうち、(一)では、時制にかかわらず、承接する動作・事態の終了時点を示すが、(二)では、主に過去の時点を示している。観智院本類聚名義抄に「曾カツテ ムカシ スナハチ ソノカミ」とあることから、(二)に過去の時点を示す用法があることがわかる。ただし、(2)の用法のほとんどが「より」を後接しており、(一二)は、「私の子は(生まれた)その時から懐に入れていました」という意味で、生まれた直後から発話時に至るまで大切に育ててきたことを述べている。(一二)では、衛門の督が落窪姫の父である中納言を哀れに思つて言つた言葉の中で用いられている。「姫君は(家を出た)その時から、父が夜中や曉に亡くなるのではないかと嘆い

ていたが……」という意味で、家出の直後から父の身を案じていたことになる。(一二)では、若宮は(生まれた)直後から寢殿に通じる渡り廊下のお部屋にお移し申し上げていたということである。いずれも過去の終了の時点の直後から、次の動作・状態が始まって現在に至ることを述べている。「すなはち」は過去の時点を示すが、「より」を後接すること、その時点に近接した動作・事態の開始を示しており、前後の緊密な関係を表す性質が、用法に反映していると言えるであろう。

次に、(3)の時間副詞として、基準時からの時間量の小を表すものについて見ていくが、基準時が明らかになるように会話文(手紙文も含む)と地の文に分けて考える。

(一四)「召し侍りけるを、すなはち候はむとせしかど、彼所に侍る人の日頃いたく惱み給へば、女御など物し給はぬ程なれば、又見譲る人なくて、え候はず侍りつる」

『宇津保物語』三・一七八・一三

(一五) 御かへりに、「昨日は、しか物し侍りしかば、すなはち参らんとせしを、日暮てん。只今参らむ」と聞え給へり。

『落窪物語』一八五・一

(二六) 大夫、「一日の御かへり、いかでたまはらん。また勘當ありなを、もてまいらん」といへば、「なにかは」とてかく。「すなはちきこえさすべく思ふたまへしを、いかなるにかあらん、もうでがくのみおもひてはべるたよりになん。…」

『蜻蛉日記』二二・三二・六

(二七) 「わざと、召しと侍らざりしかど、例ならず、許させ給へりし喜びに、すなはちも、参らまほしく侍りしを、宮、わたらせ給ふと、うけ給しかば、折あしくやはとて、今日になし侍りにける。…」とのたまふに

『源氏物語』宿木五・七一・一〇

まず会話文の例を挙げると、(二四)は、「お召しに応じて、すぐに参上しようと思つたが」で、発話時以前に呼び出された時を基準時として「その時すぐに」という意味である。(二五)は、発話時の前日に(越前守が)そう申されたので、すぐに参上しようとしたが」ということで、「すなはち」は、「昨日の越前守の発言」を基準時とした時間量の小を表す副詞である。(二六)の「すなはち」は、文頭にあるが、道綱の母が兼家への返事を大夫(道綱)にせ

かされて書いたものである。「(あなた様からのお手紙をいただいた時)すぐにお返事をさしあげようと思つておりましたが」と述べている。(二七)は、薫の中君に対する言葉で、「特にお招きにあずかったものではありませんが、いつもと違つて対面をお許しくださつたうれしさに、すぐにも参上したく思いましたが、(昨日は)句宮がお越しかどうかがいましたので具合が悪かろうと思つて、今日になりました。」と述べている。「すなはち」は、許可の出た昨日の時点を基準に「その時すぐに」という意味を表している。(二四)(二五)(一六)(二七)は、いずれも、相手からの要請に応じる場合に用いられ、発話時以前の要請の時点を基準としてゐる。時間副詞としての用法では、(二四)(二五)(一七)のような来訪や退出が約半数を占め、(二六)のような手紙の贈答が、約半数を占める。中古の和文における基準時からの時間量の小を表す時間副詞は、他に「とく」「はや(はやう)」「とみに」「つと」「にはかに」「たちまち(に)」などが挙げられるが、「すなはち」のように発話時以前の時間を基準にする傾向はない。また会話文では、「はや(はやう)」「とく」は相手への働きかけ文でも用いられるが、「すなはち」が働きかけ文に用いられることはない。中古の時間詞の中で、「すなはち」は限定的な要素が多いと言える。次に、地の文について見ていく。

(一八)「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛車を寄せて、「いざ、かぐや姫。穢き所にいかでか久しくおはせん」と言ふ。立て籠めたるところの戸、すなはち、たゞ開きに開きぬ。格子ども、人はなくして開きぬ。『竹取物語』六四・六)

(一九)うかれめにしろといふものありけり。召しにつかはしたりければ、まゐりてさぶらふ。上達部・殿上人・みこたちあまたさぶらひたまうければ、下に遠くさぶらふ。「かうはるかにさぶらふよし歌仕うまつれ」とおほせられければ、すなはちよみて奉りける、  
濱千鳥飛びゆくかぎりありければ雲立つ山を  
あはとこそみれ  
とよみたりければ、いとかしこくめで給うてかげものたまふ。

『大和物語』三二〇・三二

(二〇)「あの御方にもてまゐれ」とて、かへしつ。みたまひてければ、すなはち御かへりあり。

『蜻蛉日記』二二二・六

(二一)「……みてなむ、いたう忍び侍りつる。今、そなたにも」と、の給へり。すなはち、僧都まゐり給へり。『源氏物語』一・二六〇・五)

(一八)は、天人のことが終わった時点からの時間量を表している。(一九)は、歌を詠むことを要請された時点から、(二〇)は手紙を御覧になった時点から「すぐに」という意味である。(二一)は源氏が僧都のところに來訪すると言った時点から「すぐに」僧都が源氏を訪れる。地の文では(一九)(二〇)のような手紙の贈答、返歌などが約四割を占め、(二一)のような來訪が同じく四割を占める。會話文と同様に、相手の動作に応じており、その時から起動までの時間量を表している。地の文においても會話文と同じ傾向が見られる。次のような省略形があることは、「すなはち」に以上のような意味が定着していると考えられる。

(二二) 大將いたく歎て、宮に御文奉れ給フ。

今朝は喜びてなん。すなはちト思ウ給フレど、  
罷でなんとて侍りつれど、許させ給はねば。「その  
わたりに」とか侍りつるは、あな古めかしや

『宇津保物語』二・三三八・二

中古の和文の「すなはち」の主な用法は、(1)名詞として、連体形に承接して、従属節や副詞句を作るもの、(2)名詞として、時の状況成分となるもの、(3)副詞として、時間関係を表すものが挙げられる。(1)は、動作・状態の終了とともに、次の動作・状態が開始することを表し、「すなはち」の原形と考えられる。(2)は、時の状況成分として、時間軸上の位置づけを示すが、過去の時点を示す。ただし「より」を後接し、前の動作終了の時点の直後から、次の動作・状態が始まる場合に用いられている。(3)は、相手に対する返答や返歌、また依頼に対する訪問という手紙や心中詞での使用例が多く、相手からの要請の時点基準とした時間量を表している。(2)(3)の主語はすべて人物である。以上のことから、「すなはち」は名詞として用いられる場合には、前後のできごとの時間的な緊密性を表す特徴があると言える。従属節や副詞節を作る場合だけでなく、時の状況成分として過去を指示する場合にも、その特徴は表れている。また副詞として起動からの時間量を表す場合にも、前後の時間的に緊密な意味を有し、限定的な場面で用いられることが多く、名詞の意味との共通点が見出せる。

### 三、「即」の時間的意味

「即」字は、『説文』<sup>五下</sup>に「就食也」とあり、「食に就く」の意味を持つ。「卽」は、人の跪坐する形。「𠂔」は食膳で、「即」は食膳に人が座することを表す。

『古代漢語虚詞詞典』(一九九九)によると<sup>注⑥</sup>、「即」には、副詞・連詞・介詞の用法があり<sup>注⑦</sup>、これら虚詞の用法は実詞の「就」の意味に基づいている。

#### 副詞

1 動作・状況がすぐに行われたり、発生したりすることを表す。

2 後の一つの動作・状況が、前の動作・状況の発生や出現に緊接していることを表す。時間上の相承性を備えている。

3 人・事物・動作行為について、肯定・強調・事実の説明がその通りであることを表す。

#### 連詞

1 仮説条件  
2 譲歩条件

介詞 動作行為の発生・出現する場所・時間を示す。

「即」字は、「就」の意味に基づき「チカヅク」という動詞に由来する。「即」字の持つ空間的な接近が、介在する二つの事柄の密接性を強め、「すぐ」「ただちに」などの時間的意味や後接するものと一致する意味に発展していった。



副詞3の用法は、とりたてや換言の用法を含む。本稿では、「即」の副詞的用法に重点をおき、連詞・介詞の用法は取り上げないことにする。次に副詞の例を挙げる。

(二三) 公知之、先皇野曰「余長難也。今將禍余、請即救。」(『左伝』哀公一四年)

(二四) 今日不雨、明日不雨、即有死蚌。(『戦国策』楚策三)

(二五) 其季父項梁、梁父即楚將項燕、為秦將王翦所戮者也。(『史記』項羽本紀)

(二三) は、景公が、皇野(司馬子仲)に話す場面で、「私は難を小さい時から育ててやったのに、今や私に災いをかけようとしている。どうかすぐに助けてくれ。」という意味であり、「即」は、副詞1の基準時からの時間量の小を表す副詞で、相手への働きかけに用いられている。(二四)の「即」は、後の一つの動作・状況が、前の動作・状況の発生や出現に緊接していることを表す副詞2の用法である。(二五)は、「末の叔父を項梁といい、梁の父は他でもなく楚の將軍項燕で、秦の將軍王翦に殺された者である。」という意味で、副詞3の用法である。

漢文訓読の「即」の訓と意味について、大坪(一九八一)では、

訓読文では、原文の「即・則・乃・便・輒・廼・載・而・尋・即便・尋便・乃輒・尋即」などを読む。接続詞といってもそれぞれ特定の意味を持つ副詞的な用法を兼ねる者が多い。(四二二頁)

と述べる。<sup>注⑥</sup>「即」字の意味については、王引之の『経伝釈詞』の説から、「すぐに」と「とりもなおさず」の意味であるとしており、その読みは「すなはち」であって、次の例を挙げる。

文殊師利菩薩摩訶薩<sup>スナハ</sup>即<sup>リ</sup>子從<sup>リ</sup>座起<sup>ツ</sup>整理<sup>シ</sup>衣服<sup>ヲ</sup>

(書・大乘本生心地観經末期点 八 1-2)  
「即」字の訓については、『前田本色葉字類抄』に「即 スナハチ」(下辞字二九才3)とあり、春日(一九六九)も「すなはち」としている。<sup>注⑦</sup>

ここでは、「すなはち」と「即」の関係を見るために、上代資料の『古事記』『日本書紀』『万葉集』について検討する。大坪(一九八一)は、『古事記』や『日本書紀』では、文頭にあって、前の文を受け、下の内容が引き続き起こったり、または、前文の内容と下の文の内容とが一致することを表す「便・乃・則・輒・即」などをスナハチと読ませている。(四二二頁)としている。

『日本書紀』『古事記』の「即」には、前述した副詞1、2、3の用法が見られるが、「仮説条件」や「譲歩条件」を

表す連詞、「動作行為の発生・出現する場所・時間を示す」介詞の用法はほとんど見られない。中村（一九七三）では、『風土記』の「即」を取り上げているが、『日本書紀』『古事記』『風土記』を対象にした調査でも、以上の結果と同様である。<sup>注⑥</sup>

次に『日本書紀』及び『古事記』の例を挙げる。

(二六) 故伊弉諾尊、拔劔背揮以逃矣。因投黑鬘。此即化成蒲陶。

(二七) 故、入其野時、即以火廻燒其野。  
『日本書紀』神代紀 上 九三・一七

(二八) 今将下地時、吾云、汝者我見欺言竟、即伏最端和迹、捕我悉剥我衣服。  
『古事記』九七・七

(二九) 復劔刃垂血、是爲天安河邊所在五百箇磐石也。  
即此經津主神之祖矣。  
『日本書紀』神代紀 上 九三・七

(二六) は伊弉諾尊が、逃げる途中に「黒鬘をお投げになると、これがすぐに葡萄になった。」という意味であり、(二七)は、「その野に入った時、すぐに火によって野を焼き払った。」という意味で、いずれも「即」は基準時からの

時間量の小を表す。(二八)の「即」は、後の一つの動作・状況が、前の動作・状況の発生や出現に緊接していることを表す。(二九)は、「劔の刃より垂れる血は、天安の河原にある数多くの岩群となる。他でもなくこれが經津主神の祖である。」という意味である。特に『古事記』には、「即」一七八例が認められるが、副詞1及び2の用法が主で、時間上における前後の動作・状況の緊密な関係を表すものが中心となっている。

『万葉集』の歌には前述したように「登時」が一例のみ認められるが、題詞・左注には「即」四八例、「登時」四例がある。『万葉集』の題詞・左注は漢文で書かれたものであり、そこに使われる漢語については、これまであまり関心を集めてこなかった。ここでは、「すなはち」の訓を持つと考えられる「登時」と「即」の比較を行ってみる。

(三〇) 于時大舍人安倍朝臣子祖父乃作「斯歌」献上。  
登時以「所」募物錢二千文「給之也」。

(卷一六・三八三九左注)

(三一) 右件王卿等、応詔作歌、依次奏之。登時不記、其歌漏失。

(卷一七 三九二六左注)

(三二) 此日会集衆諸、相誘<sup>レ</sup>駛使葛井連広成、言<sup>レ</sup>須<sup>レ</sup>作<sup>レ</sup>「歌詞」。登時<sup>レ</sup>広成、応<sup>レ</sup>声、即吟<sup>レ</sup>此歌。

(卷六 九六二左注)

(三三) 尔乃衆諸誘興磨日、關此饌具雜器狐聲河橋等物、但作哥者、即應聲作此歌也。

(卷一六・三八二四左注)

(三〇) は、舍人親王が歌を作るように命じたところ、大舍人安倍朝臣子祖父という者が、この歌を作つて差し上げたという前文を受けて、「その時すぐに」募り集めた物と錢二千文に与えたのである。「登時」は、歌を献上した直後に褒美を賜つたことを表している。(三一) は、「右の各王卿たちが、詔に答えて歌を作つて、序列に従つてそれを奏上した。その時すぐに記録しなかつたために、歌詞についてはわからなくなつた。」という意味である。これらの「登時」は、前述した小島の説明にあるように、ソノトキ(「即時」ともスナハチ(短時間を示すスナハチ)の意ともなる。

(三二) は、「この日集まつた人々が駛使の葛井連広成に誘いかけて、『歌を作れ』と言つた。その時広成はその言葉に応じて、すぐにこの歌を吟じた。」という意味であるが、「登時」と「即」が共に用いられ、「登時」は時間指示を示す時の状況成分となり、「即」は起動からの時間量を表す時間副

詞となつてゐる。また(三三)は、「即應聲作此歌也。」で(三二)と同じような状況を「即」のみで表現している。これらは、いずれも歌を献上する行為に関わつてゐるが、次に挙げるような「即」の用法は、随所に認められる。

(三四) 藤原郎女聞之則和歌一首(卷四・七六六題詞)  
(三五) 還入故郷家、即作謠三首(卷三・四五一題詞)

(三四) は、「藤原郎女がこれを聞いた時にすぐに答えた歌」で、(三五) は、「故郷の家に帰つてすぐに作つた歌」である。「登時」と「即」には、近似した意味と機能があることが明らかである。従来上代資料の「すなはち」については、(一)の『万葉集』の歌のみが取り上げられてきた。仮名書きの確例がないことによるが、題詞・左注の「登時」と「即」の用法の類似や「即」の例の多さを見る時、「すなはち」との關係を仮定することもできるのではないだろうか。勅撰集の詞書には、次のような「すなはち」を見出すことができるが、『万葉集』の用法と同様、前の動作の終了時点に近接して次の動作が起こる場合に用いられており、時間量の小を表す副詞である。

(三六) 延喜御時、御むまをつかはしてはやくまいる  
へきよしおほせつかはしたりければ、すなは

ちまいりておほせ事うけたまはれる人につかはしける

(『後撰和歌集』卷十六・雑歌二・一一四四)

(三七) 春日の使にまかりて、かへりてすなはち女のもとにつかはしける

(『拾遺和歌集』卷十八・雑賀二・一九七)

このように和歌の贈答の言葉の中に、「すなはち」は入り込み、和歌の詞書きや物語中の歌のやりもらいの場面で使用されることになっていったのである。それは、「すなはち」の本質的な前後を緊密に結びつける意味が、他者とのやりとりにおいて好まれたということでもある。

#### 四、『今昔物語集』の「即ち」と「すなはち」

中古の『今昔物語集』の「すなはち」の用法については、峰岸明(一九八六)が、専ら「即」が用いられていることを指摘した。<sup>注⑩</sup>山口(一九九八)では、『今昔物語集』の「即ち」四四一例について、文体印象との関わりを中心に詳しい調査を行い、その特質を「平安和文などにおいての意味・用法と同様に、二つの事態の間の時間的間隔の短さを表現する。」と結論づけている。<sup>注⑪</sup>同集の天竺・震旦

部には三八二例、本朝仏法部・本朝世俗部には五九例と概括的には漢文訓読調と和文調の対立があるとしながらも、『今昔物語集』の「即ち」を一括して、平安和文の用法と同じであるとした点に問題があるように思う。前節で「すなはち」と「即」の用法を考察した結果を踏まえて、ここでは、『今昔物語集』の「即ち」を和文の「すなはち」とを比較検討する。

まず、明らかに和文の「すなはち」の用法と考えられるものとして、連体形に承接して、従属節を作るものが四例挙げられる。

(三八)「馬ヨリ落サセ給ツル即ち、御冠ヲ不奉デ、无期ニ由无シ事ヲバ被仰ツルゾ。」

(卷二八第七 五・六九・八)

この他「此ノ皇子ハ落入リケル即ち」(卷二第二六・一六七・六)、「宮ニ還ラム即ち」(卷三第二五・二四六・一)があり、承接する時制を選ばないことは、和文と同じである。漢字「即」には、動詞に承接する用法はなく、これは和文の用法と言える。

次に、名詞として、時の状況成分となるものを見ると、「ハ」を後接するものが一例のみあり、他は単独で文中・文頭に置かれている。和文の「すなはち」は「より」を後接し、前の動作・事態の終了の時点から、次の動作が開始する場合に限られていたが、『今昔物語集』では「より」を

後接したものは一例もない。

(三九) 継母「此ノ児ヲ何デ失テム」ト思フ心深クシテ(中略)海ニ落シ入レツ。其レヲ即ハ不云ズシテ、帆ヲ上テ走ル船ノ程ニ暫許有テ、「若君落入リ給ヒヌ」ト云テ、継母叫テ泣キ罵シル。

(卷一九第二九・一一九・八)

(四〇) 句有ルニ此レヲ録シテ云ク、「貞觀十一年ニ、法義ガ父ノ使、禾ヲ茹ル。法義、即チ、目ヲ見張テ私ニ罵テ不孝也」

(卷七第四八・一七九・一六)

(四一) 葬送ノ日、外道、其ノ所ニ集テ此ヲ見ル。又、佛來給ヘリ。即チ、炎ノ中ニ二十三歳許ノ童有リ、形端正ナル事无限シ。

(卷一第一五・八四・一四)

(三九)の「即ハ」は、継母が子供を海に投げ入れた時点を示している。ただ「暫許有テ」に対して「その時はすぐに言わないで」と解することから、単なる時間指示の意味だけでなく、起動からの時間量の小の意味を含むとも考えられる。(四〇)は、父の使いが粟を刈る時点を指している。(四一)は、文頭にあつて、前文の仏が來た時点を指示しており、「即」の二つの動作・事態を緊密に結びつける性質が、文の連接の上で効果的に働いている。「すなはち」が動作の終了の時点を基準とした「すなはち

より」に限定した用法であつたのに対し、「即チ」は、前後の時間的な緊密性を「その時」という時間指示の形によつて表現していると考えられる。日本古典大系『今昔物語集』第二冊の補注で山田が「即」について、「その時」と解せられる例として取り上げているものは、これに相当する。次に副詞として、起動からの時間量を表すものには、次のような例がある。

(四二) 國王ノ宣ハク、「其ノ母ヲ召シテ可被問キ也」トテ召スニ、即チ、召シニ随テ母參リヌ。

(卷九第四・一九二・一六)

(四三) 満財ガ云ク、「我が許ニ五百ノ劔有リ。其ノ第一ヲ取テ來レ」ト。即チ來レリ。

(卷一第一七・八一・一一)

(四四) 其ノ時ニ、提婆達多、我が手ノ指ノ端ニ毒ヲ塗テ佛ノ御足ヲ礼シ奉ル様ニテ毒ヲ付ムト為ルニ、毒即チ變ジテ藥ト成テ疵ズ癒給ヒヌ。

(卷一第一〇・七五・六)

(四五) ニノ手ニ各一ノ金ノ錢有リ。父母此ノ錢ヲ取ルニ、即チ亦同ク有リ。

(卷二第一〇・一三八・七)

(四六) 「但シ、其ノ人ノ死シ時、自ノ髮ヲ切テキ。而ルニ、其ノ置ク所ヲ隠シテ我レニ不云ザリキ。君、即チ、其ノ髮置キ給ケム所ヲ教ヘ給ヘ」

(四二)は文中に、(四三)は文頭に置かれているが、いずれも相手の要請に応じて「すぐに」行動する場合であつて、和文に多く見られた用法である。(四四)(四五)は、「毒がすぐに変化して薬となる」、「(錢が)すぐにまた手の中にある」で、いずれも無生物主語である。(四六)は、「君、すぐにその髪を置いた所をお教え下さい」という相手に対する働きかけであり、漢文に見られた用法である。『今昔物語集』では、時間副詞の用法が最も多く、実に多彩な表現がなされている。これらに照らして見ると、和文の「すなはち」は、働きかけ文には使用されない、人以外が主語になることはない等の限定があることがわかる。以上『今昔物語集』の「即」と「すなはち」を比較し、その相違点の一端を明らかにすることを試みた。注⑧

## 五、おわりに

古代語「すなはち」が「即」との関わりを持つことは、従来言われてきたことであるが、その実態を明らかにすることは、「すなはち」の意味を再考することになる。「すなはち」の本質が継起的な時間関係を表すことから、中古の和文の「すなはち」の時間的意味に焦点を当てて、意味・機能について考察した。その結果、(一)名詞として、連体

形に承接して、従属節や副詞句を作るものは、動作・状態の終了とともに、次の動作・状態が開始することを表し、「すなはち」の原形と考えられる。(二)名詞として、時の状況成分となるものは、時間軸上の位置づけを示し、過去の時点を指示する。ただし「より」を後接し、前の動作終了の時点の直後から、次の動作・状態が始まる場合に限定的に用いられている。(三)副詞として、時間関係を表すものは、相手からの要請の時点を基準とした時間量の小を表している。「すなはち」の名詞の用法は、前後のできごとの時間的な緊密性を表し、従属節や副詞節を作る場合だけでなく、時の状況成分として過去を指示する場合にも、その特徴は表れている。また副詞として起動からの時間量の小を表す場合にも、前後の緊密な時間的意味を有し、名詞の意味との共通点が見出せる。

上代の『万葉集』の題詞・左注に認められる「即」「登時」には、類似した意味が見られ、和歌の詞書きや物語中の歌のやりもらいの場面で使用される「すなはち」との関係が想定される。また中古の『今昔物語集』の「即ち」との比較によって、時の状況成分や主語の種類、働きかけ文での使用など、和文の「すなはち」の用法がより限定的であることが明らかになった。

〔注〕

① 山田孝雄一九三五『漢文訓読によりて伝へられたる語法』宝文館

宝文館

春日政治一九六九『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』勉誠社

② 小島憲之一九六四『上代日本文学与中国文学 上中下——出典論を中心とする比較文学的考察——』塙書店

③ 吉田金彦・築島裕・石塚晴通・月本雅幸編『訓点語辞典』東京堂出版

④ 仁田義雄二〇〇二『副詞的表現の諸相』くろしお出版

⑤ 秋山まどか一九九八『すなはち』攷——上古・中古を中心——『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』桜楓社

⑥ 中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室編一九九九『古代漢語虚詞詞典』商務印書館

⑦ 連詞は、句と句、文と文を繋ぐ働きをする。介詞は、目的語を伴い、介詞句を構成して、方向・場所・時間・対象等を表す。「于」「自」等がある。

⑧ 大坪併治一九八一『平安時代における訓点語の文法』風間書房

⑨ 春日政治一九六九『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』勉誠社

⑩ 中村宗彦一九七三『風土記における『即』の用法』『大谷女子大学紀要』7

⑪ 峰岸明一九八六『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会

⑫ 山口康子一九九八『今昔物語集』における『即』——主として文体印象とのかかわりについて——『人文科学研究報告』（長崎大学教育学部）56

⑬ 『今昔物語集』には次の例のように、接続詞として、前文または語の言い換えを表すものも認められるが本稿では取り扱わない。

其死人即我子也。（卷七第四八 二・三〇八・五）

三寶ノ物ヲ誤用シテ罪ヲ得ル事无限シ。我ガ持テル所ノ経ハ、即チ此レ金剛般若経也。

（卷第 二・一三二・三）

〔調査資料〕

日本古典文学大系（『日本書紀』『古事記』『万葉集』『竹取物語』『大和物語』『落窪物語』『宇津保物語』『源氏物語』『栄花物語』『蜻蛉日記』『枕草子』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『今昔物語集』岩波書店）新釈漢文大系（明治書院）